

車内にホテルの趣、居心地よく

住江織物、Maas見据え提案

カーペット大手の住江織物は次世代車向け内装の開発体制を整える。毎年開く自動車メーカーへのデザイン提案に、従来部門に加えインテリアや鉄道・バス内装の各部門も参加させる。カーシェアリングの普及や自動運転、次世代移動サービス「Maas(マース)」の進展などで車の役割が変わることを見据える。全社の知恵を持ち寄り、ホテルのような内装を提案するなど新たな価値付けを行う。

このほど、車の内装部門やインテリア部門など計約40人からなるデザインチームが次世代車のコンセプトデザインを完成させた。部門をまたいで車の内装デザインに取り組むのは初めて。今秋の次期デザイン提案には鉄道やバスの内装部門も参加させる。

作成したデザインでは2025年ごろの車内を想定、五つ星ホテルの客室も手掛ける内装部門の知見を生かした。大人6人がゆったり座れるコ

の字形の大きな座席や植物柄のシートなど、従来の車向けとは異なる意匠を多用した。自動車内装部門のデザインを統括するスミノエティシントクノの古林成英氏は、「カーテンの柄をシートに採用する発想に衝撃を受けた」と振り返る。提案を受けた自動車メーカーにも斬新さを評価する声があったという。

自動運転が実用化されれば車内は運転する場から「リビングルーム」のようにくつろぐ空間になると、住江織物では想定する。またカーシェアや相乗りで不特定多数の人が利用する「公共空間」としての役割も増えるとみる。これら2つの空間の特徴を兼ね備える「ホテルの客室」をデザインの軸に据えた。

10月から始まる車メーカーへの次期デザイン提案では、実証実験段階のMaasを念頭に鉄道・バスの内装開発部隊もデザインに加わる。Maasに組み込まれる車両では

地域性や電車・バスとのデザインの一貫性が必要になると予想。住江織物は国内鉄道のシート表皮材で6割を超すシェアを持ち、多くの観光列車も手掛けた実績がある強みを新たなデザインに生かす。

「100年に1度」と言われる車産業の変化で新たな車内空間が模索され、異業種も参入。パナソニックは家電や企業向けシステムのノウハウを生かし、リビングのような自動運転車の室内空間を提案する。実用化に向けて部門横断のチームを立ち上げた。

対する住江織物は自動車向け内装で約90年の歴史を持つ老舗だ。シート生地やカーマット、天井材などを幅広く手掛け、トヨタやホンダなど全ての日系メーカーと取引がある。ただ、足元では新型コロナウイルスの感染拡大で自動車の工場稼働停止や生産調整が相次いでおり、内装のデザイン提案にも影響する可能性がある。(荻野聡祐)



カーテンの柄をシートの背もたれ部分に使った次世代車の内装イメージの一つ



開放的な大きな窓とソファのようにゆったりしたシートでくつろげる空間も提案